海外ニュース

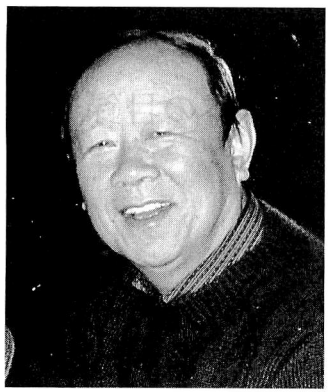
チベット自治区に保存された梵文写本の目録編纂

——その二十有余年の紆余曲折——

罗　　炤（Luo Zhao ルオジャオ）
松田　和信（訳）

1983年5月，西南民族学術大会に参加するため私はラサに向かった。学会が終わった後，私はラサに残ることにした。深い学識を持つラマに師事して仏教論理学と認識論にかんするチベット語文献を学びたかったからである。チベット自治区の政府主席ドルジェ・ツェテン（Dorje Tseten/ rDo rje Tshe brtan）氏は，その当時チベット自治区社会科学院の院長を兼任していて，今回の学会の主催者でもあった。学会期間中に私は彼を訪ねて先生を紹介してもらえるようお願いした。ドルジェ・ツェテン氏は，中国社会科学院の研究者がラサでチベットの仏教学者に師事して学ぶことを知って喜んだ。彼は親切にも著名なゲシェーのドクミ・チャンパロトゥー（'Brog mi byams pa blo gros）師を私の先生として紹介してくれた。当時のチベットは文化大革命の錯誤を正す宗教政策がまだ初期段階にあった。ゲシェーのドクミ師は各方面の人々に非常に尊敬されてはいたが，当時の彼は仏教界の重要なポストを与えられていなかった。彼はただチベット自治区社会科学院の顧問に就いていただけであった。幸運にも1983年から1985年に至る2年間はゲシェーのドクミ師の手が比較的空いていた時期で，彼から慈悲深く熱心な教えを受けた。彼の修養を積んだ博識と，心が清らかで気品のある徳性は私にとって終生忘れ難い。

北京からラサへ発つ前に，私は北京大学の季羨林教授を訪ねた。教授は私に，自分が文化大革命の困難な状況下で翻訳して最近出版された『ラーマーヤナ』の中国語訳をドルジェ・ツェテン氏にと託され，さらに私には，たとえ数葉を



罗　炤（Luo Zhao）教授

一瞥することが許されるだけでも，チベット自治区に保存されている梵文写本を見る機会を得るよう努力することを提案した。私はドルジェ・ツェテン氏に季教授の希望を伝えた。ドルジェ・ツェテン氏はこの話を聞いてとても喜び，私に言った。「昨年，中国外務省が文書をチベット自治区政府に送付してきて，インド政府と中国政府の間で文化交流協定について議論した際に，インド側はチベット自治区に保存されている梵文写本の共同研究について中国側の同意を求めてきたというのだ。外務省はそれらの写本の詳細を知りたいと願っている。我々はただ梵文写本があることを知っているだけで，それらの中身については何も分からず，外務省にはまだ返答していない。しかし今や問題は解決されることになった。何故なら，あなたが手伝ってくれれば，重要性に応じて写本を一級品から三級品の三種に分けて分類する完全な目録を編纂することができ，写本の内容が明らかになるからだ。」私はこれを聞いて非常に驚いた。そのような答が返ってくるとは思いもしなかったからである。ラサに来る前に梵文写本目録作成の準備を何もしていなかったし，私の梵語能力では目録を作成するには荷が重すぎた。しかし私がもっと心配したのは梵文写本を見る機会が本当にあるかどうかで，だから私が無能であることは黙っていることにした。そこで「まずいくつかの写本を読ませて下さい。それでもしそのような仕事を遂行できないと分かったら，季教授に報告して彼の意見を待ちます。」としか答えることができなかった。ドルジェ・ツェテン氏は私が遠慮していると思い，直ちにチベット自治区文化局局長のテンジン（Tanzing/bsTan 'dzin）氏に命じて，私が梵文写本の目録を作成するためにすべてのドアを開けるようにしてくれた。

チベット自治区文化局は，ロカ（Lho kha 山南）地区の文化財管理委員会によって保存されている写本を見せるために，まず私をツェタン（Tse thang）に

送った。出発前に，私はポタラ宮へ行って，門の上に架けられている額から梵語とチベット語を併記した銘文を鉛筆で拓本に取った。目録作成の準備はこれがすべてであった。ちなみに，私はデーヴァナーガリー文字で書かれた梵語を読む訓練を少し受けていただけであった。

ロカ地区の文化財管理委員会の担当者たちは温情にあふれた人たちで，私が到着するとすぐに一包みの写本を私の前に取り出した。これが私が見た最初の写本であった。それを見て私は，チベット語仏典の形式が実は梵文写本の貝葉形式をまねていることに気がついた。しかし，貝葉に書かれた文字はデーヴァナーガリーではなく，私には理解できなかった。大変不安になったものの，口には出せなかった。二，三時間が過ぎても，写本のタイトルがどこにあるのか探すことすらできなかった。閉館時間になり，私は担当者たちに写本をゲストハウスの自室まで持ち帰り，夜も見ることができないかどうか尋ねた。私は私を信頼してくれた2人のチベットの友人に心から感謝したい。おかげで私は3日間続けて自室で写本を読む許可をもらったのである。私の精神的プレッシャーがどんなに強烈であったか。もし最初の写本を同定できなければ，自分にとって恥ずべきことであるだけでなく，他の写本にもはやアクセスできなくなってしまうという，より深刻な結果をもたらしかねなかった。しかし幸いにも三日目の夜，ポタラ宮のチベット語と梵語を併記した銘文の拓本から読むことのできた二十個ほどの文字と徹底的に比較しつつ，想像をたくましくして読んでいるうちに，ついに私はその写本を『八千頌般若経』に同定できたのだった。

チベット自治区の梵文写本は，時代を異にしてインドの様々な場所からもたらされたもので，二十種以上の書体が見られる。特に結合文字のせいで，最初に写本を見た時には判読できそうになかった。しかし最初の写本を同定した後は，判読作業は比較的容易になった。ロカ地区に保存された梵文写本の予備的目録は十日間で完成した。

ラサに戻り，ドルジェ・ツェテン氏とチベット自治区文化局にこのことを報告をすると，みんな喜んでくれた。ちょうどその頃，私と一緒に北京から来た何人かの研究者たちがサキャ寺へ行こうとしていた。私は次にサキャ寺に保存

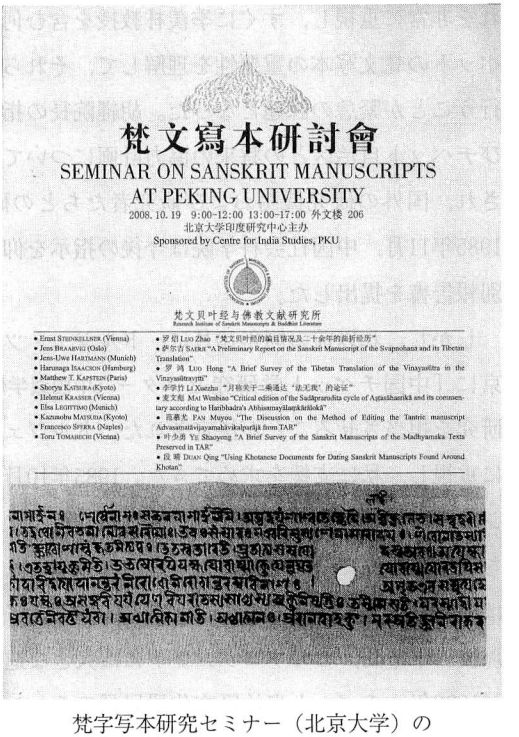
されている梵文写本の目録作成のため，彼らに同行することに決めた。

サキャ寺にあった梵文写本の一部は1962年にラサに移され，残った19（あるいは17）点は30年以上前にラーフラ・サーンクリトヤーヤナによって写真撮影あるいは手書きで写され，その中の重要なものは彼によってすでに出版されている。しかし当時，チベットの人々はこのことを知らなかった。サキャ寺の写本目録作成の仕事は比較的容易であったが，僧院は海抜4300メートル以上のところにあり，気候も水質もすべてが良くなかった。付け加えると，サキャ寺に来る２ヶ月前に北京で献血をしたためであろうか，７月にサキャに着いた時に私の体はひどく弱っていた。夜しばしば息が詰まって目が覚め，よく眠れなかった。こんな自然条件の下，文化的巨人たるサキャ・パンディタが生きたのがこの場所であることは本当に不思議なことだ。だから私はサキャ寺に対して特別な敬意や感情を持っている。当時，寺へのアクセスは非常に不便であったものの，私は三年の間に続けて三回訪れ，その度ごとに文化巡礼をするかのような感覚を覚えた。三回目に訪れた1985年９月は祭りの休日で，どこにも食べ物を売っていなかった。私とチベットの友人は食料を手に入れることができず，物乞いをするしかなかった。物乞いで得たジャガイモを煮た時，圧力鍋が爆発して友人は危うく命を落とすところだった。今にしてみると，すべての経験が，チベット文化への敬意，サキャ寺へのあこがれ，そしてチベットの友人たちへの思いを深めたのである。

1983年８月，サキャからラサに戻った時，チベット自治区文化局と文化財管理委員会は，私にノルブリンカ宮の梵文写本目録を作成させることを検討し準備をしていた。一方で私はゲシェーのドクミ師に就いて『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の勉強を始めた。

1984年の４月から11月と，同年の11月から1985年の６月にかけて，私はノルブリンカ宮とポタラ宮に保存されている梵文写本の目録を二度に亘って作成した。それら二つの場所に保存されている梵文写本は価値と質の点でチベット自治区における最高のものである。ほとんどの写本は二つの時期にもたらされたものである。ひとつはダライラマ五世の統治時代である。写本の多くはチベッ

ト全域の寺院，特にカギュー派の寺院から略奪されたり収集されたものである。それらの写本は最初デプン寺（'Bras spungs）のガンデン宮殿（dGa' ldan pho brang）に収蔵され，後にポタラ宮とノルブリンカ宮に移されたものである。もうひとつの時期は1962年である。チベット自治区政府の梵文写本に対する最初の調査の後，写本の一部が集められラサに運ばれた。この努力の結果として，幸運なことにそれらの写本は生き残った。さもなくば文化大革命の間に破壊されたことであろう。



梵字写本研究セミナー（北京大学）のプログラムポスター

1985年７月１日，『チベット自治区現存梵文写本目録』は完成した。目録作成の過程で，ドルジェ・ツェテン氏，テンジン氏，チベット自治区文化局，文化財管理委員会等の多くの人々と関係機関は，私を信頼してあらゆる方面で援助してくれた。目録作成の間ずっと私は季羨林教授と連絡を取っていた。教授はこの仕事に大いに注意を払って下さり，常に温かい激励をいただいた。

1985年８月，ドルジェ・ツェテン氏の同意を得て，新華社通信のチベット支局はチベット自治区の梵文写本について詳細な内部報告を配信した。中国社会科学院院長の胡繩氏はこの報告を読んで，より総合的な報告を私に求めた。10月初旬，私は北京へ戻って中国社会科学院に詳細な報告を行った。胡繩氏はこ

れを非常に重視し，すぐに季羨林教授を含む何人かの学者を訪ねた。そしてチベットの梵文写本の重要性を理解して，それらの写本に対する研究を組織的に行うことが緊急の課題となった。胡繩院長の指示の下，研究プログラム，およびチベット自治区との将来の協力計画についての議論が中国社会科学院で開始され，国外の研究機関および研究者たちとの研究協力が実現可能となった。1985年11月，中国社会科学院は今後の指示を仰ぐため中国共産党中央書記に特別報告書を提出した。

しかしこれ以前の同年10月に，ドルジェ・ツェテン氏を総責任者として，北京に「中国チベット学研究センター（中国蔵学研究中心）」を設立し，梵文写本研究を担当させることが決定された。ドルジェ・ツェテン氏はこの研究を非常に重視し，私に支援を求めてきた。1985年10月から1987年９月まで，私はドルジェ・ツェテン氏が中国チベット学研究センターを設立し，梵文写本研究を立ち上げる準備に全面的に協力した。1987年の６月から９月までの間に，ラサでは梵文貝葉写本のマイクロフィルム撮影が完了した。しかし残念ながら，それ以後二十年間，このプロジェクトには大きな進展が見られない。

1992年，チベット自治区文化局局長のチャンパ・プンツォク（Byams pa phun tshogs）氏は，国際的な研究者と研究機関における梵語研究の概要を提供してくれるよう私に要請した。私は氏に様々な研究グループの既得の利害関係のせいで梵文写本の置かれている複雑な状況を説明し，私がその事柄からある程度の距離を置いていたいこと，将来いかなる問題にも巻き込まれたくないことを伝えた。しかし同時に，私の限られた知識から，梵語学者として信頼でき評価が高いと思われたウィーン大学のシュタインケルナー（Ernst Steinkellner）教授，ハンブルク大学のシュミットハウゼン（Lambert Schmithausen）教授，ローザンヌ大学のブロンクホルスト（Johannes Bronkhorst）教授をチャンパ・プンツォク氏に紹介した。ブロンクホルスト教授が，シュタインケルナー教授およびシュミットハウゼン教授と共に，オーストリア科学アカデミー，スイス科学アカデミー，ドイツ研究会議（DFG）の資金援助を仰いで，チベット自治区と共同研究機構を設立し，チベット自治区における学生の養成を支援してくれる

ことを私は期待した。そこで中国社会科学院大学院に対して，チャンパ・プンツォク氏の計画をブロンクホルスト教授に紹介するよう要請した。1ヶ月少し後に私は，上記の三つの機関の承認とともに三人の教授が署名したチャンパ・プンツォク氏宛の書簡の複写を受け取った。その書簡には，チベットとの協力を希望する旨が表明され，その詳細が述べられていた。しかし後で分かったが，チャンパ・プンツォク氏は彼らに返事を出さず，その計画は何ら結果を見ることなく終わった。

1993年，チャンパ・プンツォク氏に北京で会ったとき，氏は，数人の日本人が当時一時的に北京の民族文化宮に保存されていた梵文写本コレクション全体のマイクロフィルムの複製を作成したことを聞いたと話してくれた。しかしマイクロフィルムは出国前に税関に没収され，その後チベット自治区はすべての写本をラサに戻すように要請した。チャンパ・プンツォク氏がヨーロッパの三人の教授たちに返事をしなかったのはこの特定の事件と何か関わりがあったのだろうか。氏はそれ以上は何も言わなかった。

1995年は『チベット自治区現存梵文写本目録』の完成10周年であったが，研究には何ら進展がなかった。私はチベット自治区文化局に手紙を書いて，目録の出版を準備していることを伝えた。しかし実際には出版計画は全くなかった。出版してくれる出版社も見あたらなかった。商業的に失敗に終わるに違いなかったからである。私の目録の目的はチベット自治区政府に梵文写本の基礎的な事実を提供することにあった。しかし十分な目録を編纂するには時間的制約があまりにも多く，質的に出版できる状態にはなかった。にもかかわらず私がこの手紙を書いたのは，チベット自治区政府に対して，梵文写本研究のために，できるだけ早く何らかの具体的な行動に出るよう後押ししようとしたからである。文化局はすぐ返事をよこしてきたが，その内容にはここでは言及したくない。私も直ちに文化局に返信して，極めて正直な私の思いを表明しておいた。それ以降は梵文写本について何もする気にならなかった。

2003年，ドイツで講義していた時，私はシュタインケルナー教授からウィーンに招待された。以前から教授に何度も招待されていたので，その時は断るこ

とができなかった。ウィーン大学で，現物がそれぞれノルブリンカ宮とポタラ宮に保存されている『プラマーナ・サムッチャヤ・ティーカー』と『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の複写を見て驚いた。さらにシュタインケルナー教授の指導の下で，研究グループが二冊の研究書をすでに完成させていることを知った。この事に私は衝撃を受けた。夏休みにわざわざ帰国し，中国政府と学界とにチベット自治区の梵文写本研究に対する注意を喚起させようとして，中国社会科学院幹部にウィーンで起こっていることを報告した。しかし中国社会科学院はその時少し対策を取っただけで，何ら顕著な効果をもたらしはしなかった。

2005年は『チベット自治区現存梵文写本目録』の完成20周年である。私は完全に失望した状態にあったが，歴史にきちんとした記録を残すため，チベット自治区の梵文写本の状況にかんする一通の手紙を年末に胡錦涛国家主席に書いた。驚いたことに，胡主席はこの事に大いに注目されて，このプロジェクトを急ぐように１ヶ月の間に二度も連続して指示されたのである。中国社会科学院とチベット自治区は迅速に行動を起こした。しかし３年が経っても，いまだ顕著な進展は見られないように思える。

チベット自治区の梵文写本は，人類全体のためにチベット人民によって残された貴重な文化遺産のひとつである。二十数年もの間，私は犠牲を払い，何人かの同僚たちの恨みも買い，健康も損ねたが，後悔はしていない。目録作成の仕事を通してチベットの文化とチベット人民に対する尊敬の念が深まり，チベットのためには労を厭わないと心から思っている。仕事の遅延した原因の大部分は，関係する政府機関と個人の間の協調と信頼感の欠如と官僚主義に行きつく。遅延の原因は無知や，あるいは所謂，意地の悪い人達が示唆しているような，共産党が犯した「チベットに対する文化的虐殺」のせいでもない。正確にいうと，疑心暗鬼にかられて厳しい予防的処置が取られたせいである。わずかではあるが，自分の利益のためにマイクロフィルムを売った者も実際いたのである。その結果，さらに厳しい予防策が取られた。現在，北京大学の教授と学生たちが，チベットの梵文写本研究に顕著な進展を収めていることを聞いて大

変嬉しく思っている。将来，あなた方がさらなる進展と成果をあげることを私は心から願っている。

（本報告は，2008年10月19日，北京大学の梵文写本仏教文献研究所とインド学研究センターが主催する「梵文写本研究セミナー」のために作成したものである）

*　　*　　*

訳者付記　2008年10月，北京においてチベット自治区に保存されている梵文仏教写本をテーマとする二つの国際会議が連続して開催された。ひとつは13日から17日にかけて中国チベット学研究センター（中国蔵学研究中心）が主催した「2008北京チベット学研究セミナー（2008北京蔵学討論会）」の一パネルとして開かれ，もうひとつは，19日に北京大学の梵文写本仏教文献研究所とインド学研究センターが主催した「梵文写本研究セミナー（梵文写本検討会）」であった。前者のパネルはウィーンのシュタインケルナー教授が招集し，ラサで写本の保存修復に携わっている研究者を含めて国内外の研究者18名が２日間に亘って研究発表を行った。後者は北京大学の段晴（Duan Qing ドゥアンチン）教授が招集し，北京大学を中心とする８名の研究者が研究発表を行った。なお，シュタインケルナー，段晴両教授から北京に来るように言われて二つの会議に参加した日本人は，龍谷大学の桂紹隆教授，オーストリア科学アカデミーの苫米地等流博士，および筆者の３名だけであった。ここに和訳した中国社会科学院の罗炤（Luo Zhao ルオジャオ）教授の報告は19日の北京大学のセミナーにおいて発表されたものである。

チベットに大量に保存されていると伝えられる梵文仏教写本については，一体どれだけの数の写本が残され，一体いかなる未知の文献が含まれているのか，一般には公開されていないが，複写を重ねて研究者に届けられた三種の写本目録を通してある程度の情報は得られていたものの，その詳細はベールに包まれ，特に日本の研究者はこれまでもどかしい思いを抱いていたように思う。今回筆者は二つの会議に参加して20名以上の発表を聞き，隔靴掻痒の感は幾分かは解消した。特に筆者はルオジャオ教授の報告には驚かされた。日本の研究者も是

非知っておくべきことであると考えてここに和訳した次第である。ルオジャオ教授は本報告を中国語で読み上げ，パラグラフごとに英訳者が英訳を加えたが，本和訳は基本的には英訳に基づき，英訳では省略された言葉を中国語原文から相当量補足した。またチベット語のカナ表記については同僚の小野田俊蔵教授に見ていただいた。中国語については佛教大学大学院博士課程の陸艶（ルーエン）さんに手伝ってもらったほか，創価大学の辛嶋静志教授，苫米地等流博士からも御教示を得た。北京大学大学院の葉少勇（Ye Shaoyong）さんにも多くの点で助けられた。発表直後の昼食会の席で筆者に優しく接して下さり，報告を和訳して日本で出版することを快諾してくださったルオジャオ教授に心より御礼申し上げる。

ところで，チベット自治区に保存された梵文写本に対して現在までに作成された三種の目録は以下の通りである。

A『民族図書館蔵梵文貝葉經目録』1985：王森目録（*Wang Sen Catalogue*）

B『チベット自治区現存梵文写本目録』1985：罗炤目録（*Luo Zhao Catalogue*）

C『中国蔵学研究中心収蔵的梵文貝葉經マイクロフィルム目録』1987：桑德目録（*Sang De Catalogue*）

三種の目録は編纂者の名前を取って通称で呼ばれているが，Aの王森目録は北京の民族文化宮に1960年代から一時的に移されていたシャル寺旧蔵本を中心とする約250点ほどの写本に対する目録。最近になって，フォン・ヒニューバー教授夫人によって影印版の形で公開された（*Indica et Tibetica* 47, 2006, p. 297f）。本報告はBの罗炤目録をめぐる物語であるが，罗炤目録では王森目録に含まれる写本は言及されない。それらは当時北京に移されていたからである。罗炤目録は，1985年の時点で，ポタラ宮，ノルブリンカ宮を中心とするチベット各地に保存されていた梵文写本の目録。貝葉ばかりでなく紙写本も含まれる。写本を一級品から三級品に分け，各写本の葉数，サイズ，タイトル，コロフォン等が記載されている。ルオジャオ教授が手書きした全体で500枚を超える原稿用紙のまま残されて未出版。通し番号が附されていないので何点の写本が登録さ

れているかは簡単には数えられないが，総数は1000点を超えるように思える。中国チベット学研究センターで編纂されたCの桑徳目録は，ラサにおいて1987年にマイクロフィルム撮影された写本（主として貝葉本）の目録。全体で163頁よりなり，約650点の写本について，タイトル，葉数，現物の保存場所等が記される。パソコンで入力されたものであるが未出版。この目録に掲載されている写本については，中国チベット学研究センターに写真とフィルムが存在する。罗炤目録を見る限り，紙写本類にも重要な写本が含まれているが，それらはほとんど撮影されていない。なお王森目録に含まれる写本類については，マイクロフィルムが北京大学に保存されている。現物は1993年にチベットに戻されて，現在はラサのチベット博物館に保存されている。

筆者の個人的関心から一点報告しておきたいことがある。かつて筆者はロシアのサンクト・ペテルブルグに保存されている一連のネパール系写本群の中から『瑜伽師地論』摂決択分の梵文写本断簡を発見した（『日本西蔵学会会報』34号，1998年）。断簡は第13葉から第24葉に至る紙写本12葉であったが，それらはダライラマ13世に使えたブリヤート出身の仏教僧ドルジエフによってロシア皇帝ニコライ二世に献上されたものであった。帰国後，改めて罗炤目録を調べてみると，ポタラ宮の経典セクション一級品の第１号の４番として登録されている内容不明紙写本98葉が，葉数，葉番号，フォーマット，各セクションのコロフォン等から判断して，ロシアに持ち出された12葉に続く摂決択分の残りの写本であることが分かった。残念ながら紙写本であるので写真撮影されていない。現物がポタラ宮にあるだけである。また『瑜伽師地論』本地分の声聞地に先行する部分の写本については，ルオジャオ教授の報告にあるサキャ寺に現在も残されている写本群の中に含まれているとのことである。これらの写本を研究者が自由に見ることができるのは一体いつになるのであろうか。我々の次の世代を待たねばならないのかもしれない。

最後に，ルオジャオ教授の報告の中で言及される日本人について，発表を聞いた後で教授に直接尋ねたが，通訳者を介して「学術振興会の人」と答えられた。これが誰を指すのか筆者には皆目分からない。シュタインケルナー教授の

報告 *A Tale of Leaves* (Amsterdam 2004) と併せて本報告を読むと，我が国であまり知られていなかった目録編纂に至る経緯がよく分かる。なお，オーストリア科学アカデミーと中国チベット学研究センターの共同研究プロジェクトからは，最近その第4巻としてヴァスバンドゥ（世親）の『五蘊論』がシュタインケルナー教授と李学竹（Li Xuezhu）博士によって出版された。『五蘊論』に対するスティラマティ（安慧）の注釈書も来年以降にミュンヘンのヨヴィタ・クラマー（Jowita Kramer）博士によって出版される予定である。第3巻もほぼ同時に刊行されたが，そちらは故蔣忠新（Jiang Zhongxin）教授によるこれまでには公表されていない『法華経』写本3本のローマ字転写である。

（2008年11月25日）

追記　校正時に余白が認められたので少し書き足しておきたい。北京に行って嬉しかったことはサルジ（Saerji, 薩爾吉）君に再会したことである。サルジ君は北京大学のセミナーでは英語で司会役を務め，自身の研究発表も英語で行った。彼に初めて会ったのは2001年8月のことであった。ノルウェーの実業家マーティン・スコイエン氏の買い集めたアフガニスタンの仏教写本を調査するため，オスロ大学のイエンス・ブロールヴィック教授，ミュンヘン大学のイエンス＝ウヴェ・ハルトマン教授らと共に筆者は数週間オスロで過ごしたが，サルジ君は北京大学からの交換留学生としてブロールヴィック教授の許にいたのである。オスロで一人勉強していた彼がたくましく成長し，北京大学のインド学科に属する，段晴教授を含む6人の専任教員のうちの一人になっていたのである。なおサルジはファーストネームで，チベット族の彼に名字はない。また写本の保存修復を実際に行っているラサの研究者も，ブロールヴィック教授の許に2年間留学して梵語を学んでいた。オスロ大学は現在ラサに分校を開いてチベットの子供たちに英語教育を行ってもいる。さらに会議で研究発表した一人はハルトマン教授の許に留学していた北京大学の院生であった。ここでは日本人研究者と日本の大学の影は薄い。私たちにできることは何か，正直なところ，写本研究の希望に満ちただけの北京ではなかった。